

ちかごろ、予兆があったり、同じパターンで被害を被っている出来ごとが繰り返されているにも関わらず、なすすべもなく悲劇的な結果がもたらされている事件、災害が多い。

広島のマツダ寮の殺人も、横浜の病院の事件も、予兆があったことは報じられている。前回のコラムでも触れたが、バングラのテロや相模原の障害者殺人もそうだった。



繰り返される社会システムの破綻。他山の石とされることなく、ただ消え去るのみである

台風10号により洪水、土砂災害に見舞われ、高齢者施設で9人の入所者が亡くなったケースもそうだ。避難勧告は「夜のため危険を判断し、ださなかった」(町長)、施設管理者が地域の地形上の危険や、避難準備情報の意味すら知らなかったといったことは、阪神大震災以降の21年間の災害をみても、いくどとなく繰り返されてきた。

この岩手県の高齢者施設など、すぐ横にある別の施設の建物の2階に避難していれば、誰ひとりとして亡くなることはなかったのだ。

なぜ、教訓をいかせることができないのか？ よくいわれるのは「わがこと感」がない、正常化の偏見で「自分には起こらないだろう」という思い込みといったことだが、そうではないだろうと思っている。そんな認知レベルまでも達してないのではないか。

そもそも、毎年、毎月のように、社会システムの破綻が様々な形でみられながら、全く学べないのは悲劇的だが、どうも、それぞれの事象を注意深く見ていると、そもそも、そういう出来事が世間で数多く起きていることすら、知らないのだろう。いや、知ろうともしないのだろう。

マスコミにおいても、ニュースのサイクルが早すぎる。前回のコラムからあげた出来事をすべてみても、このコラムが公開される時までにはもはやニュースの対象ではなくなっているだろう。

どうも、社会全体が、精神衰弱に陥っているのではないかとさえ思える。明治以来目指してきた社会の近代化のなかで、人間は進化し続け、あらゆる苦悩から自由になれるという妄想がさらに妄想を呼び、もはや、己の姿すら、幾日も、幾年もの間、鏡に映し眺めることすらしないのであろう。

こうした現代人に醸成されていく「もろさ」を寺田寅彦師は看破していた。

師宣わく、明白に正真正銘に「泣き」また「笑う」のは人間の特権であるから、そうしななければならない。しかし、(現代においては)「泣き」「笑う」ことが人間の仕事のうちで、もっとも、むつかしいことのように思われる、と。

かくして、無表情な社会においては、ただ、時が流れていくのみなのである。

(平成28年9月)